COP 10 への取組み

All About “COP 10”, Aichi-Nagoya, Japan

浅田孝男

Takao ASADA

１　生物多様性とは？（なぜ重要か？）

宇宙に浮かぶ私たちの故郷、地球。ここには、40 億年の歴史を経て様々な環境に適応して進化してきた生き物（微生物、昆虫、植物、動物等）が暮らしています。それぞれに個性があり、物質循環や食物連鎖など目には見えなくても精緻で複雑な関係で世代を越えてつながれています。私達の地球の環境は、無数の生き物とその環境が織りなすネットワーク、生態系によって長い年月をかけて創られてきたものです。生物の多様性とは、このように自然が創り出した「多様な生き物のつながりの世界」のことを表す言葉です。

そして、私たち人類は、この生き物たちからの恵み無くしては生存することすらできないのです。生存に不可欠な酸素は植物が作り出します。食料、木材、繊維、薬品、地域の文化など、人間の暮らしは生物多様性からの恵みを利用することによって成り立っています。

しかしながら今、１年間に約４万種というかつてないスピードで、生き物たちが絶滅しているといわれています。約 6,500 万年前、恐竜時代は 1000 年に１種の絶滅であり、桁違いのスピードです。そして、１つの種の絶滅は、複雑なつながりで成り立っている地球生態系全体へも影響を及ぼし得るのです。しかもこの絶滅は、様々な人間活動や地球温暖化を主な原因とするものであり、わずか 30 万年前に誕生した私たち人類が、40 億年の歴史を持つ地球生態系の危機をもたらしています。

現在名前の付いている生物種は約 175 万種、未確認のものを含めると、地球上には約 3,000 万種の生き物が暮らしているといわれています。もし、現在の絶滅速度で生物多様性が損なわれていけば、様々な点でそれに依存している人類の生存も危うくなってしまいます。

２　COP 10 とは？（何が行われるのか？）

2010 年 10 月 11 日から 29 日にかけて、愛知県名古屋市で「生物多様性条約第 10 回締約国会議」が開催されます。英語名称は、The 10th Session of the Conference of the Parties to the Convention on Biological Diversity で、生物多様性条約の第 10 回目の締約国会議を意味し、その略称が COP10（コップ・テン）です。この条約は、生物多様性の衰退という地球規模の課題の解決に向けた重要な国際的な枠組であり、1992 年のブラジル・地球サミットで気候変動枠組条約と共に生まれました。現在、日本を含む 191 の国と地域が締結しています。

COP10 は、2002 年の COP6（オランダ・ハーグ）で採択された「2010 年目標（締約国は現在の生物多様性の損失速度を 2010 年までに顕著に減少させる。）」の検証と、2010 年以降の枠組作りなどが話し合われる重要な節目の会議です。また、2010 年は、国連の定める国際生物多様性年に当たり、この年に開催される COP10 へは国際的な注目が一層集まります。

３　愛知・名古屋の取組み

（１）なぜ愛知・名古屋なのか？

2006 年 9 月に愛知県、名古屋市及び地元経済界は国に対して、COP10 を日本、愛知・名古屋へ誘致することを要望しました。それを受けて国は 2007 年 1 月に日本招致を閣議了解し、条約事務局へ誘致を表明しました。そして、2008 年 5 月 30 日の COP9（ドイツ・ボン）において、日本、愛知・名古屋での COP10 開催が満場一致で決定されました。

愛知・名古屋は COP10 誘致に当たり、当地域の相応しさを次のように述べています。①「人と自然の共存と持続可能な社会の創造」という「愛・地球博」の理念を理解し共有できた当地域は、万博の理念、成果を継承し発展させ、持続可能な社会づくりに貢献できる地域であること。②愛知・名古屋は、世界有数の産業集積地域でありながら、自然と共生するモデルといえる取組みを進めてきた地域であり、自然と共生する日本の姿を世界にアピールできる地域として、生物多様性を将来に引き継ぐための議論を行う舞台として最適であること。③「愛・地球博」で実証された高いホスピタリティー、会議等支援実績、並びに中部国際空港始め卓越した国際交流機能基盤を活かして会議の成功に寄与できる地域であること。

（２）地元の体制等

地元では、2008 年 5 月 30 日の開催決定を受けて、同年 9 月 2 日に、条約事務局（国連）と日本政府が主催する会議の開催と運営を支援する実行組織として、「生物多様性条約第 10 回締約国会議支援実行委員会」を発足させました。会長は愛知県知事、会長代行が名古屋市長、副会長が名古屋商工会議所会頭と（社）中部経済連合会会長であり、地元の行政と経済界が総力を挙げて支援する体制が整いました。

委員には、外務省、農林水産省、環境省、県市長会及び町村長会、参与には経済産業省、国土交通省のほか中部圏知事会構成県、愛知学長懇、経団連自然保護協議会、国際自然保護連合日本委員会等、行政、経済界、学界、NGO など幅広い参画を得た構成となっています。

（３）何をやるのか？

COP10 の会議自体は、主催者である条約事務局（国連）と日本政府が開催・運営し、地元は、基本的に会議の運営支援の役割を果たします。会議が安心、安全、円滑で快適に運営されるよう、地域を挙げて支援します。具体的には、宿泊施設の確保やボランティアの配置、警備への協力や災害対策、ホスピタリティーの発揮などです。

この他、生物多様性の保全や持続可能な利用等を達成するためには、県民・市民、自治体、企業、大学、NGO など多様な主体が参加・交流して理解を深めたり、地域から情報発信することが重要です。このため、地元の関連事業として、これらの主体ごとの会議やフォーラムを実施するほか、生物多様性の普及啓発に向けた講演会やシンポジウムを開催し、各主体の取組みを推進します。

COP10 の会場としては、国際会議そのものは、名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で開催され、各国の政府代表、NGO 及びプレス関係者始め、約 7,000 名の参加者が見込まれます。また、関係主体・機関の交流・発表の場として会議場に近接する白鳥公園、生物多様性の体験・交流の場として愛・地球博記念公園、COP10 の情報発信の場として名古屋都心の栄オアシス 21 などを広く活用し、様々な形で COP10 へ参加する機会を作ってまいります。

また、会議の合間にエクスカーション等も企画して、地域の紹介や地域情報の提供も行います。

加えて、COP10 終了後も生物多様性の保全等を地域の環境政策の基軸として一層の取組みを進めるため、地域の中長期ビジョンである「あいち自然環境保全戦略（愛知県）」や「生物多様性なごや戦略（名古屋市）」の策定が、2009～2010 年度にかけて進められています。